Chapter I 映画館での上映

1

概況

スクリーン数の推移

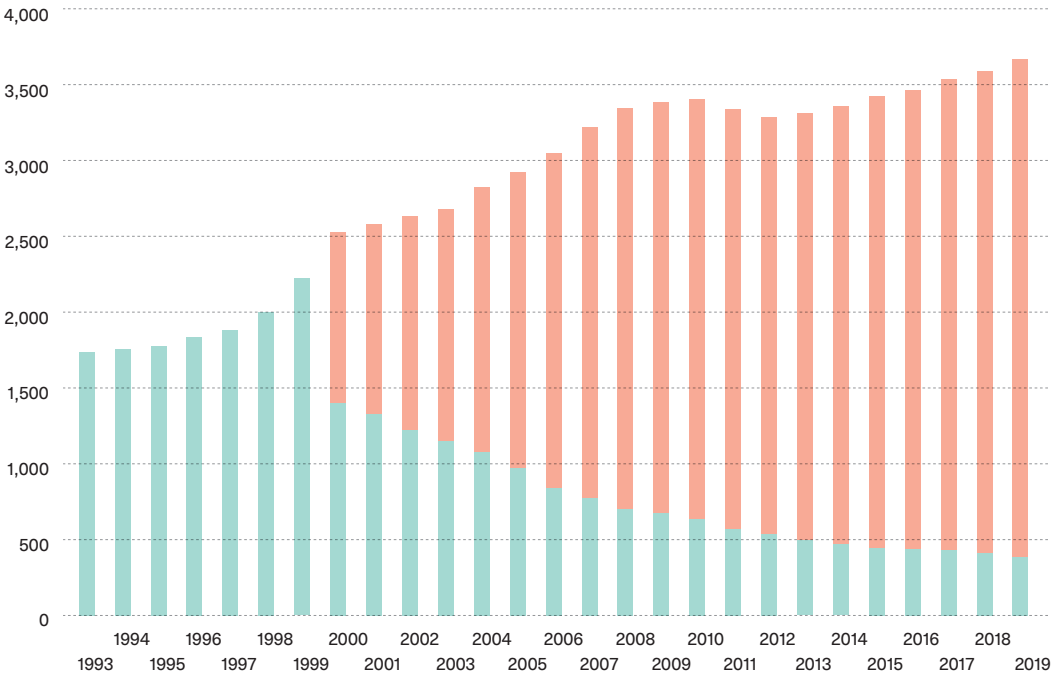
2019年のスクリーン数は3627スクリーンで、前年から36スクリーン増加している。2010年から2019年の10年間の変化をみると、映画館数は107館減少したが、スクリーン数は152増加している。シネコンが34館380スクリーン増加し、シネコン以外の映画館は141館228スクリーン減少している。

シネマコンプレックス(シネコン)は、2010年から2019年の10年間で77館(サイト)726スクリーン新設されて、3197スクリーンとなり全スクリーンの88.1%を占めるに至った。シネコン以外のスクリーン数は2017年までは減少を続けていたが、この2年間はわずかずつではあるが、増加している。2010年にはシネコン322館に対してシネコン以外は378館で、まだ、シネコン以外の映画館がシネコンよりも多かったが、2019年には映画館の数でもシネコンが上回り、映画館全体の6割以上がシネコンとなっている。

直近の2018－2019年には、28の映画館(170スクリーン)が開館している(閉館していた映画館のリニューアルオープンも含む)。このうち、14館(サイト)139スクリーンがシネコンである。宮城県では、2011年以降休館していた「シアター・フォルテ」が2018年に「ユナイテッド・シネマ フォルテ宮城大河原」(7スクリーン)として再オープンしている。ユナイテッド・シネマは、他にも、千葉県松戸市に「ユナイテッド・シネマ テラスモール松戸」(2019)、福岡市に「ユナイテッド・シネマ福岡ももち」(2018)、また、沖縄県浦添市に「ユナイテッド・シネマPARCOCITY浦添」(2019)をオープンしている。東京都心では、再開発が進む池袋で「シネマ

fig. 01

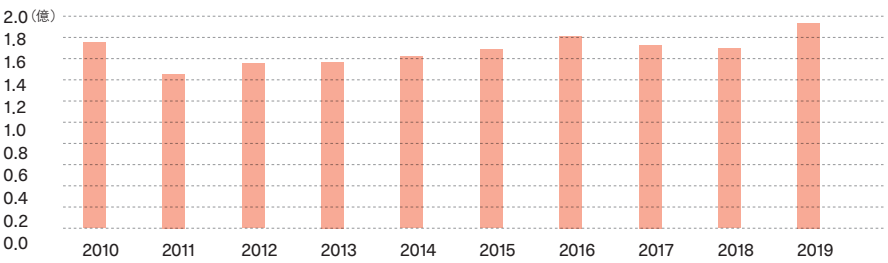
スクリーン数の推移(1993–2019)



	スクリーン数	内シネコン
1993	1,734	–
1994	1,758	–
1995	1,776	–
1996	1,828	–
1997	1,884	–
1998	1,993	–
1999	2,221	–
2000	2,524	1,123
2001	2,585	1,259
2002	2,635	1,396
2003	2,681	1,533
2004	2,825	1,766
2005	2,926	1,954
2006	3,062	2,230
2007	3,221	2,454
2008	3,361	2,659
2009	3,398	2,741
2010	3,475	2,817
2011	3,339	2,774
2012	3,290	2,765
2013	3,318	2,831
2014	3,364	2,911
2015	3,437	2,996
2016	3,476	3,055
2017	3,530	3,109
2018	3,591	3,163
2019	**3,627**	**3,197**

fig. 02

観客数の推移(2010–2019)



	観客数(千人)	平均入場料金(円)
2010	174,358	1,266
2011	144,726	1,252
2012	155,159	1,258
2013	155,888	1,246
2014	161,116	1,285
2015	166,630	1,303
2016	180,189	1,307
2017	174,483	1,310
2018	169,210	1,315
2019	**194,910**	**1,340**

サンシャイン池袋」の閉館後、「グランドシネマサンシャイン」(12スクリーン)が開館して話題を集めた。

シネコン以外では、ミニシアター14館(31スクリーン)が開館している(再開を含む)。「前橋シネマハウス」(←シネマまえばし)、「京都みなみ会館」、「あつぎのえいがかんkiki」(←アミュあつぎ映画ドットコムシネマ)、「伏見ミリオン座」といったミニシアターが再開を果たし、「角川シネマ新宿」は、アニメーション専門の映画館「EJアニメシアター新宿」に生まれ変わった。

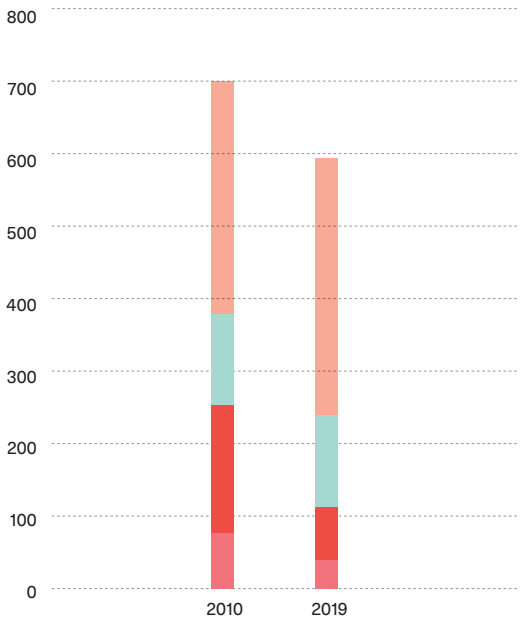
木下グループによるミニシアター「キノシネマ」が東京・立川と横浜に開館、沖縄市にはスターシアターズがショッピングモール内にミニシアター「シネマプラザハウス1954」を開館した。佐賀県唐津市には「シアターエンヤ」が開館し、唐津に約30年ぶりに映画館が復活した。中小の町で、パン屋・カフェ・書店(ミニ図書室)・ライブハウスなど、"映画プラスアルファ"を提供する、従来の興行館とは異なるコミュニティ密着型の「映画の場所」を志向する「準・映画館」ともいうべき映画の場所も増えつつある。2018年には、「ガシマシネマ」(佐渡島)、「ゆいロードシアター」(石垣島)が、2019年には「シネ・グルージャ」(西舞鶴)が開館、それぞれの館の個性を打ち出し、映画館の新しいあり方を模索している。→fig.01

観客数の推移(2010–2019)

2019年の観客数は、1億9491万人、興行収入は2611億8000万円で、観客数は、前年に比べて2570万人、15%増加した。観客数が1億9000万人を超えたのは1971年以来48年ぶり、また、興収も2000年代に入って最高を記録している。日本映画、外国映画とも10億円以上の興収をあげた作品数が前年を上回り、ファミリー層、若年層を中心に多くの観客を集めた『天気の子』、『アナと雪の女王2』、『アラジン』、『トイ・ストーリー4』の4作品が100億を超える大ヒットとなった。→fig.02

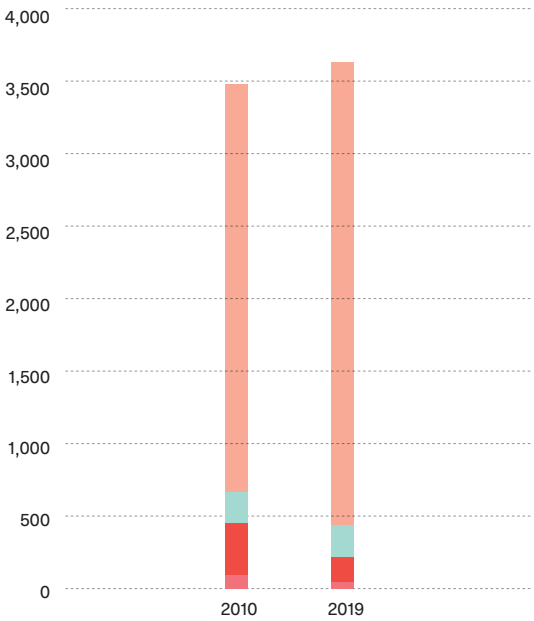
fig.03
種類別にみる
映画館数・スクリーン数の変化
(2010–2019)

種類別映画館数(サイト数)の変化



	2010	2019	2010→2019
シネマコンプレックス	322	356	34
ミニシアター/名画座	125	127	2
既存興行館	176	72	-104
成人映画館	77	38	-39
シネコン以外	378	237	-141
合計	700	593	-107

種類別スクリーン数の変化



	2010		2019		2010→2019
シネマコンプレックス	2,817	81%	3,197	88%	380
ミニシアター/名画座	198		217		19
既存興行館	372		169		-203
成人映画館	88		44		-44
シネコン以外	658	19%	430	12%	-228
合計	3,475		3,627		152

fig.01,02ともに
「日本映画産業統計」
(日本映画製作者連盟)、
『映画上映活動年鑑』
(コミュニティシネマセンター刊)参照

映画館・スクリーン数
『映画年鑑』別冊「映画館名簿」(時事映画通信社刊・キネマ旬報社刊)、
『映画上映活動年鑑』(コミュニティシネマセンター刊)参照

種類別にみる映画館数・スクリーン数の変化（2010–2019）

この10年間で、映画館数は700館から593館となり、107館、約15.3%減少している。一方、スクリーン数は3475スクリーンから3627スクリーンとなり、152スクリーン増加している。映画館数は、この10年間減少を続けてきたが、直近の2018年から2019年には28館が開館し、映画館数も584館から593館となり、9館増加している。

シネマコンプレックス（シネコン）

種類別にみると、シネコンが356館3197スクリーンで最も多く、全スクリーン数の88%を占めている。10年間では、34館380スクリーン増加している。2000年代に入ってから2008年までは、毎年20–30館のペースでシネコンがつくられたが、2009年以降はそのスピードは緩やかになり、年間5–10館が開館するレベルに落ち着いている。他方、2010–2019年の10年間で24館のシネコンが閉館している。

ミニシアター／名画座

ミニシアター／名画座は、127館217スクリーンで、この10年間で2館19スクリーン増加している。2019年には、「キノシネマ立川高島屋S.C.館」「キノシネマ横浜みなとみらい」「ホワイトシネクイント」等、8館ものミニシアターが開館している。既存興行館の中には番組をミニシアター的な編成へ移行して存続しているものもあり（宇都宮ヒカリ座、千葉劇場、塩尻東座、長野ロキシー、進富座等）、閉館した既存興行館がプログラム編成を変えてミニシアターとして再開される例（上田映劇、御成座、横浜シネマリン、高田世界館、豊岡劇場、シアターシエマ、日田リベルテ等々）も全国各地に見られる。「既存興行館」と「ミニシアター／名画座」の境界は曖昧になりつつある。

既存興行館

既存興行館は72館169スクリーンとなり、10年間で、映画館数104館減、スクリーン数203スクリーン減となっている。この10年間で100を越える映画館が閉館したが、特に、シネコンが急増した後の2010–2013年は毎年15–20館以上が閉館している。近年では、都市型のシネコンの増加に伴い、東京や神奈川、静岡、大阪など大都市の中心市街地の既存興行館の閉館が進んでいる。2018年に「TOHOシネマズスカラ座」と「みゆき座」を含める形で「TOHOシネマズ日比谷」が開館し、長年、映画ファンに親しまれてきた「TOHOシネマズ日劇」が閉館、2019年には「有楽町スバル座」が閉館している。

成人映画館は、38館44スクリーンとなり、10年間で半数以上の39館44スクリーンが閉館している。→ fig. 03

地方別にみる種類別映画館数・スクリーン数の変化

2019年の全国の映画館数は593館で、10年間で107館減少している。スクリーン数は3627スクリーンで152スクリーン増、増加率は多少低くなっている。地方別にみると、映画館数・スクリーン数がともに減少しているのは北海道・東北地方のみである。また、関東地方を除く、すべての地方で人口は減少しているが、北海道・東北地方は6%減少と、他の地方に比べて人口の減少率がかなり高い。

また、全人口、全スクリーン数に占める各地方の割合を比較すると、中部地方と九州・沖縄地方が人口シェアに比べてスクリーンシェアが1%以上高く、特に中部地方は、スクリーンシェアが19.88%と、人口シェアの16.8%に対し約3%以上高くなっている。

シネコンは、全ての地域において映画館数、スクリーン数ともに増加しているが、2000年代に入ってから2008年までの毎年20～30館のシネコンが開館していた時期に比較すると、増加のペースは緩やかになっている。とはいえ、10年間では、関東地方（8館104スクリーン）や、近畿地方（9館105スクリーン）、九州・沖縄地方（7館66スクリーン）など、依然として大幅に増加している地方もある。北海道・東北地方は1館1スクリーンの増加にとどまっている。

一方、既存興行館はこの10年で、関東では33館61スクリーン減、中部地方は22館40スクリーン減、近畿でも19館44スクリーン減となっている。当初、多くのシネコンが郊外の幹線道路沿いに多くつくられたが、この10年間は中心市街地で開設されることが続いており、東京、名古屋、大阪、兵庫など大都市の中心市街地の既存興行館が急速に姿を消している。

ミニシアター／名画座は、関東地方、中部地方、九州・沖縄地方では、10年前よりも多くなっている。この10年間で41のミニシアター／名画座が開館しており、東京・大阪・名古屋・京都・広島といった大都市以外では、大館市（御成座）、鶴岡市（鶴岡まちなかキネマ）、上越市（高田世界館）、上田市（上田映劇）、豊岡市（豊岡劇場）、唐津市（シアターエンヤ）、沖縄市（シアタードーナツ、シネプラザハウス1954）など、20万人以下の中小市町村でミニシアターがつくられることが増えている。

成人映画館は、全ての地方において減少しているが、上野のオークラ劇場は2010年にリニューアルオープンしている。→ fig. 04

fig. 04

地方別にみる種類別映画館数・スクリーン数の変化（2010–2019）

北海道・東北地方	2019 映画館	2019 スクリーン	2010 映画館	2010 スクリーン	2010→2019 映画館	2010→2019 スクリーン
シネマコンプレックス	42	317	41	316	1	1
ミニシアター/名画座	7	17	12	23	-5	-6
既存興行館	13	30	27	48	-14	-18
成人映画館	3	3	5	6	-2	-3
シネコン以外	23	50	44	77	-21	-27
北海道・東北地方合計	65	367	85	393	-20	-26

北海道・東北地方の人口	
2019	13,948,791
2010	14,842,055
増減	-893,264
増減率	-6.0%

関東地方						
シネマコンプレックス	117	1095	109	991	8	104
ミニシアター/名画座	57	95	55	85	2	10
既存興行館	18	38	51	99	-33	-61
成人映画館	4	7	13	17	-9	-10
シネコン以外	79	140	119	201	-40	-61
関東地方合計	196	1235	228	1192	-32	43

関東地方の人口	
2019	43,507,357
2010	42,604,085
増減	903,272
増減率	2.1%

中部地方						
シネマコンプレックス	70	650	66	590	4	60
ミニシアター/名画座	19	27	16	21	3	6
既存興行館	13	34	35	74	-22	-40
成人映画館	10	10	19	20	-9	-10
シネコン以外	42	71	70	115	-28	-44
中部地方合計	112	721	136	705	-24	16

中部地方の人口	
2019	21,212,664
2010	21,715,859
増減	-503,195
増減率	-2.3%

近畿地方						
シネマコンプレックス	55	509	46	404	9	105
ミニシアター/名画座	16	34	20	32	-4	2
既存興行館	12	34	31	78	-19	-44
成人映画館	11	12	19	21	-8	-9
シネコン以外	39	80	70	131	-31	-51
近畿地方合計	94	589	116	535	-22	54

近畿地方の人口	
2019	22,318,982
2010	22,757,897
増減	-438,915
増減率	-1.9%

中国・四国地方						
シネマコンプレックス	32	254	27	210	5	44
ミニシアター/名画座	11	17	11	17	0	0
既存興行館	7	15	16	39	-9	-24
成人映画館	3	3	8	9	-5	-6
シネコン以外	21	35	35	65	-14	-30
中国・四国地方合計	53	289	62	275	-9	14

中国・四国地方の人口	
2019	11,005,569
2010	11,540,710
増減	-535,141
増減率	-4.6%

九州地方・沖縄						
シネマコンプレックス	40	372	33	306	7	66
ミニシアター/名画座	17	27	11	20	6	7
既存興行館	9	18	16	34	-7	-16
成人映画館	7	9	13	15	-6	-6
シネコン以外	33	54	40	69	-7	-15
九州地方・沖縄合計	73	426	73	375	0	51

九州地方・沖縄の人口	
2019	14,257,857
2010	14,596,783
増減	-338,926
増減率	-2.3%

全国	2019 映画館	2019 スクリーン	2010 映画館	2010 スクリーン	2010→2019 映画館	2010→2019 スクリーン
シネマコンプレックス	356	3197	322	2817	34	380
ミニシアター/名画座	127	217	126	200	1	17
既存興行館	72	169	175	370	-103	-201
成人映画館	38	44	77	88	-39	-44
シネコン以外	237	430	378	658	-141	-228
全国合計	593	3627	700	3475	-107	152

全国の人口	
2019	126,251,220
2010	128,057,389
増減	-1,806,169
増減率	-1.4%

人口　総務省統計局発表「人口推計」参照
映画館数・スクリーン数　『映画年鑑』別冊「映画館名簿」(時事映画通信社刊・キネマ旬報社刊)、『映画上映活動年鑑』(コミュニティシネマセンター刊)参照

fig. 05–1

映画館地図 | 2010

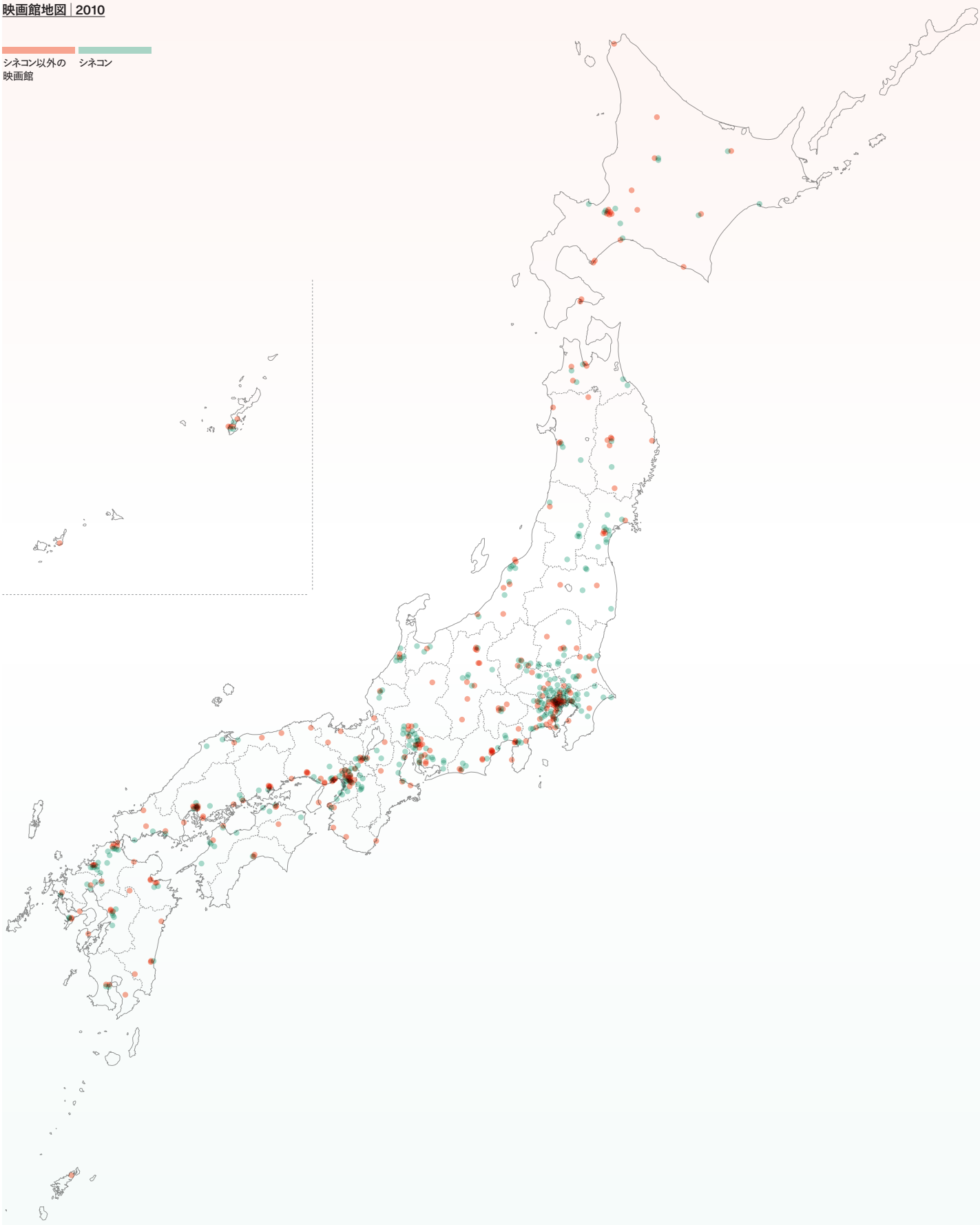


fig. 05–2

映画館地図｜2019